1988年6月18日第三種郵便物認可　毎月１回２０日発行

［月刊］

キャッチピース

56

通巻135号／1997.9.20　定価100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！
米軍基地を撤去しよう！
反核運動を継続し、核廃絶を！
憲法９条を世界に！
市民による平和政策を提起しよう！
草の根の国際共同作業を進めよう！

有事立法反対●ハガキ運動のよびかけ

小樽●平和船団報告　湯布院●チャンプル・フォーラム
あいば野●日米共同演習に反対しよう
追跡●劣化ウラン弾はどこにいったのか？

新ガイドラインは憲法へのクーデター

9月5日小樽港。インディペンデンス入港に抗議する「平和運動センター」のデモ（写真・今井明）

●維持会員（月額）
個人　1口1000円
団体　1口2000円

●参加会員（月額）
個人　1口　500円
団体　1口1000円

●通信会員（年額）
3000円

（会費は本紙購読料を含みます）

脱軍備ネットワーク
キャッチピース

これは 憲法に対する クーデターである

新「ガイドライン」に抗議する

小樽のヨコスカ平和船団with北海道・新潟・青森の仲間（写真・今井明）

緊急声明

9.24 キャッチピース

九月二四日、米国で「ガイドライン（日米防衛協力のための指針）」の改定の最終報告が明らかにされました。私たちは、この新しい「ガイドライン」が単に日米の軍事的関係を危険な方向に変えてしまうだけでなく、憲法の保障する市民の基本的人権を否定する内容を含んでいるが故に、これに強く反対します。

新「ガイドライン」の眼目は、自衛隊だけでなく日本の自治体を含む民間人を、米軍の行う戦争に全面的に協力させる体制を作ることにあります。そのために自衛隊法の全面的な改定はもちろん、新たに民間人を動員できるようないわゆる「有事立法」の制定が政治家の間で公然と語られ、法案の提出も次期通常国会で行われると言われています。これは日本という国を戦争が自由にできる方向へと根本的に作り変えるクーデターと呼ぶにひとしい行為です。

日本国憲法の平和主義はいつのまに無効とされてしまったのでしょう。そもそも新「ガイドライン」の想定するような、アメリカ軍への官民一体となった戦争協力を是とする決定は、一体いつ誰が下したのでしょうか。しかも新「ガイドライン」ではそのアメリカの行う戦争には、「周辺事態への対処」も含まれています。この「周辺」は「地理的概念でない」とされており、結果として何らの限定もないものです。この点で現行安保条約の「極東」という限定は完全に捨て去られています。

安保条約の「制約」さえ超える軍事的な決定が、その法的・行政的位置が不明確な政府間の単なる約束によって、国民的な議論なしに行われようとしています。私たちはこれをを決して認めるわけにはいきません。事は外交だけでなく国民の基本的人権、そして憲法の根幹にかかわる問題だからです。

しかも、何より軍事を最優先したこの「ガイドライン」の路線を進めていく過程で、冷戦終結後に日本が真っ先に取り組まなければならない課題が、都合よく忘却されようとしています。沖縄が突きつけた米軍基地による人権侵害、日本自身がアジアから信頼されるために軍縮をどう実践するのかといった課題は、政治家の脳裏からは消え去ったように見えます。

「安全保障」とは、人々が安全で平和に暮らすためのあらゆる努力のことであり、その主体はあくまでも人々＝民衆です。国防官僚の密室協議という非民主的

新「ガイドライン」は私たちの「安全を保障」しない！

キャッチピース

ハガキ運動を始めます！

解説・データ付●カンパ二〇円（予定）

橋本首相へ　要求 案（文面は現在検討中です）

(1)新「ガイドライン」に受入についての民意を問うため、衆議院の解散総選挙か国民投票を行うこと。

●新「ガイドライン」検討過程の全情報を国民の前に明らかにすること。

●「有事立法」に着手しないこと。

(2)米軍の戦闘行為を支援する「有事立法」ではなく、平時の米軍活動の下での住民の安全を保障するため、「日米地位協定」の見直しを行うこと。

●国民生活を犠牲にした、「思いやり予算」など米軍駐留経費負担を抜本的に見直し、大幅削減を来年度予算に反映させること。

これは最低限の要求です。

10月中旬配布開始予定

形成過程においても、冷戦思考から全く脱却していない軍事一色の「有事論」をとっても、また、すでに存在する様々な基地被害が放置・拡大されようとしていることを見ても、「新ガイドライン」は日本とアジア太平洋の人々にとっての真の「安全保障」とは全く相いれないものです。

軍縮と社会的公正、互恵平等に根ざしたアジア太平洋民衆相互の対話と信頼醸成の進展は、必ずや新「ガイドライン」を「過去の遺物」として葬り去ることでしょう。私たちはそのための努力をいっそう強めていきます。

〈行動計画〉

(1) ハガキ・キャンペーン：十月中旬から　目標二万枚

緊急に首相に最低限の項目として以下のことを要求するハガキキャンペーンを開始します。

●要求要旨（未確定）

①新「ガイドライン」に受入についての民意を問うため、衆議院の解散総選挙か国民投票を行うこと。

・新「ガイドライン」検討過程における、米側の要求を含む全情報を国民の前に明らかにすること。

・議論を尽くし、国民的合意が形成されるまで「有事立法」に着手しないこと。

②米軍の戦闘行為を支援する「有事立法」ではなく、平時の米軍活動の下での住民の安全を保障するため、「日米地位協定」を見直すこと。

・国民生活を犠牲にした、「思いやり予算」など米軍駐留経費負担を抜本的に見直し、大幅削減を来年度予算に反映させること。

(2) 政党・議員への公開質問

―十月中旬

前記の要求項目に関連した公開質問を送り、回答をまとめて発表します。

(3) 自治体への要請

米軍による利用が確実と見られる港湾・空港を抱える自治体に軍事利用に反対するよう要請します。

（九月二四日プレス発表）

米艦入港ラッシュの中に新「ガイドライン」が見える

田巻一彦 編集部

二一日には、原子力空母ニミッツと六隻の随伴艦が横須賀に入港したが、この「大物」もかすむほどの軍艦入港が基地か民間港を問わず、これでもかと繰り返された。

その都度、「補給と休養」とか「友好親善」「文化の理解」など、もっとらし

（六ページへ）

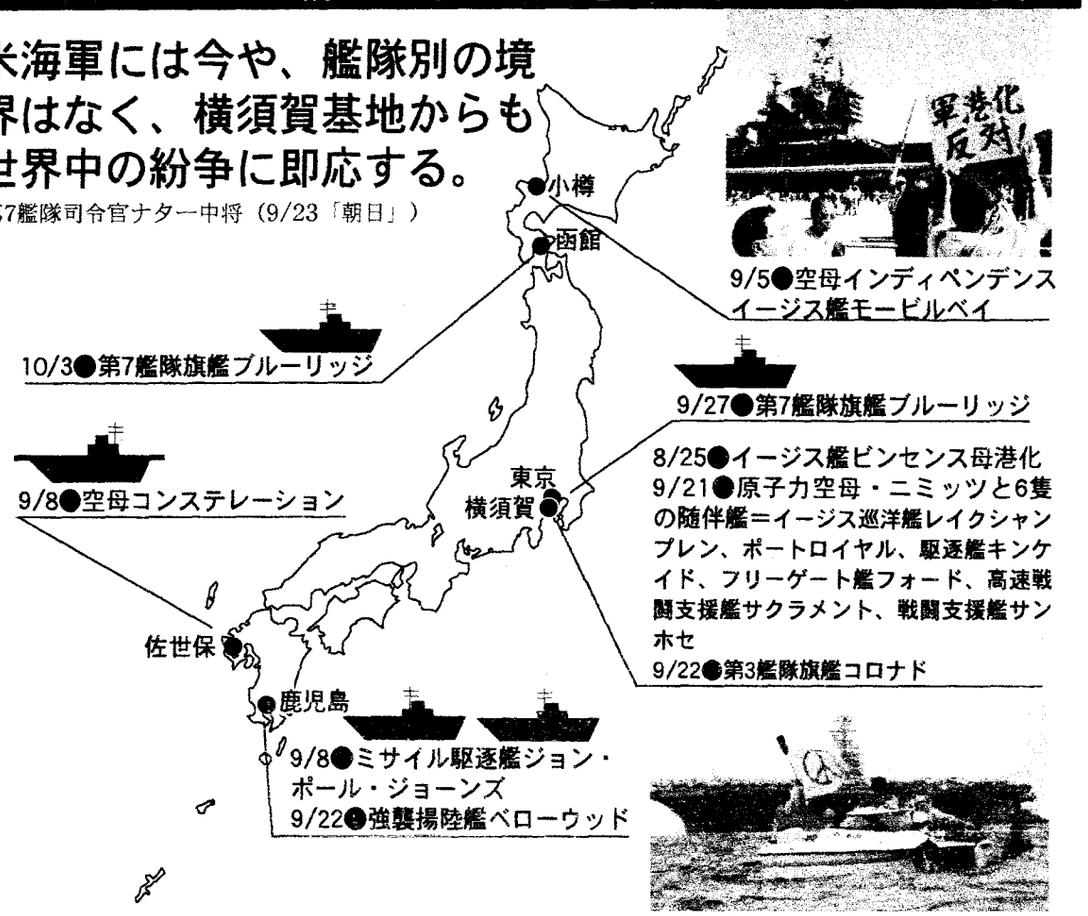
何を意味する？入港ラッシュ

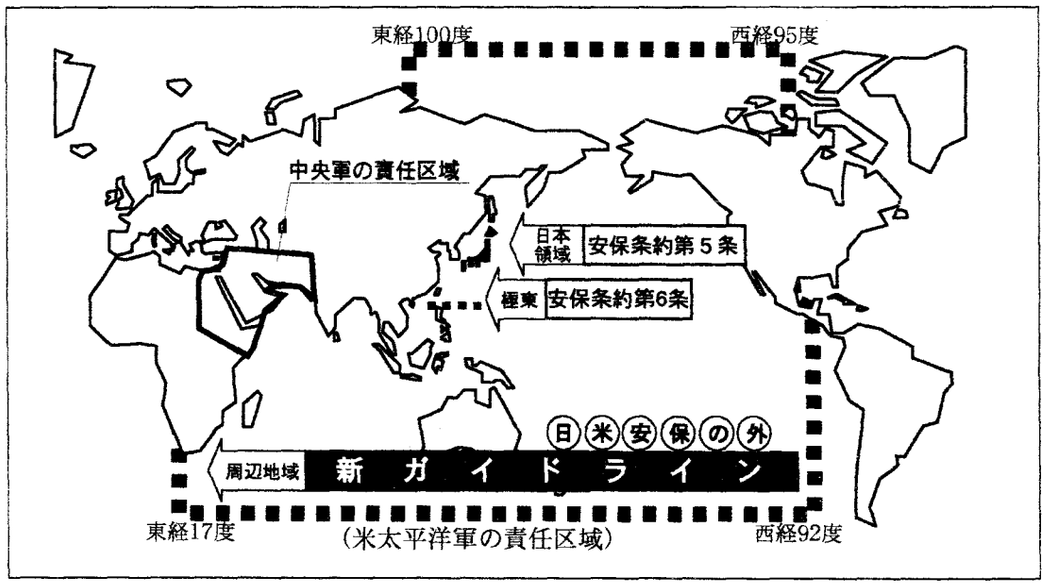
五日のインディペンデンスの小樽に始まり、二七日のブルーリッジの東京まで、九月は米艦の入港ラッシュだった。

「新ガイドライン」の嵐が全国の港を襲う

米海軍には今や、艦隊別の境界はなく、横須賀基地からも世界中の紛争に即応する。

第7艦隊司令官ナター中将（9/23「朝日」）





（四ページから）

い目的が公表された。だが、それがウソなのは前号で書いたとおりである。小樽にせよ鹿児島にせよ、「有事利用」をにらんだ港の調査、そして入港にあたっての様々な条件に慣れるための「慣熟訓練」がその目的である。

それにしても異常である。一時期には実に三個の空母戦闘団（空母と七～八隻の随伴艦で構成）が日本周辺にいたことになる。中東から本国に帰るコンステレーション（八日佐世保）、中東に向かうニミッツそして日本周辺にとどまるインディペンデンス。たまたま偶然の「すれ違い」で片づけられるのだろうか。

新しい「指揮システム」テストのために大結集

その理由を、正直に話してくれたのが、第三艦隊の旗艦コロナドに乗って横須賀に来たブラウン中将。第三艦隊は、日付変更線の東、米本土近くを責任区域にしている。第三艦隊所属の船も日付変更線を越えれば第七艦隊の傘下に入る。しかし、コロナドは、「第三艦隊旗艦旗艦」のまま横須賀までやってきた。それだけでもただならぬ気配だが、ブラウン中将によれば、横須賀への入港は、「米海軍の次世代指揮統制システム（通称「リング・オブ・ファイヤー」）の実験」が目的。さらにコンステレーションやニミッツもこの実験に参加していた。

（九月二三日「朝日新聞」）

軍艦の大結集は偶然ではなく、「補給と休養」でも「文化の理解」を目的としたものでもなかった。同じ記事には、第七艦隊司令官ナター中将の次のような談話も載っている。「米海軍に今や、艦隊別の境界はなく、横須賀基地からも世界中の紛争に即応する」。本心は「横須賀基地からも」でなく、「日本のあらゆる港から」と言いたかったに違いない。

これが新「ガイドライン」の核心である。「周辺事態」は「地理的概念ではなく、事態の性質に着目したものである」という日米の合意と先のナター中将の発言を重ね合わせれば、それは明らかだ。ひとたびアメリカが「事態の性質」が「有事」であると認めたならば、世界の何処で起こった「事態」であれ、日本にとっての「周辺事態」となり、日本の戦争機械は回転を始めるのである。その機械の働きを最大限に高めるために、日米は、「調整メカニズム」（本当の意味は「共同作戦本部」）と「共同作戦計画」を持ち（そこには例えば先の「リング・オブ・ファイヤー」を米企業から買い、自衛艦に装備することも含まれるだろう）、「共通の準備体制」（同じく「即応体制」＝危機の程度の基準）と「共通の実施要領」（同じく「交戦規則」＝武力行使の基準）を確立するのである。

誰がそんな約束をしてよいといったのか。

「民間協力」のひな形＝小樽で起こったこと

小樽に目をやろう。あの美しい港町で、空母入港にどのような「民間協力」が行われたのか。小樽「遠征」から帰った「ヨコスカ平和船団」の仲間に聞いた話である。

・着岸地の水深を十三メートルにする浚渫は昨年までに完了（「四年前」の説もあり）。

・タグボートは三隻。二隻は小樽市役所所属、一隻は石狩新港から。

・二隻の台船は秋田県男鹿市船川港から。

・水の補給は市の水道。

・ゴミは民間業者が収集、市清掃局へ。

・し尿船（兵士用）は横須賀の民間船。

・市の幹部職員が整理に動員　etc

これらにかかった費用は、当然すべて私たちの税金から支払われた。

平時の「親善」名目での入港でさえ、民間港であればこれだけの仕事が必要になるのである。これが、「有事」ということになればどうなるのか。

これから、朝鮮半島を爆撃に行きます、という空母に群がるのは子供連れやルーズソックスの女子高生だけではないだろう。市の職員も民間労働者も今回のように平穏に空母を受け入れないだろう。だいいち、市民も市長も労働者も、小樽が人殺しの拠点になることにそう易々とは同意しないだろう。今回、「反対する理由がない」と受け入れた市長も、「軍事利用は拒否する」という立場を変えてはいない。

小樽の動きに日米の支配者たちが抱いた共通の関心はここにあったにちがいない。いざ、有事という時に何がハードル、ネックになるのか、そのハードルとネックをクリアするためにどのような―新「ガイドライン」の用語を使えば―「法的及び政策的検討」つまり「有事立法」が必要なのか。その実験場に、小樽の次に選ばれるのはどこの港なのだろうか。

●

もう一度問おう。誰が、こんな道を選んだのか。

周辺事態における協力の対象となる機能及び分野並びに協力項目例

（ガイドラインの別表）

機能及び分野			協力項目例
日米両国政府が各々主体的に行う活動における協力	救援活動及び避難民への対応のための措置		・被災地への人員及び補給品の輸送 ・被災地における衛生、通信及び輸送 ・避難民の救援及び輸送のための活動並びに避難民に対する応急物資の支給
	捜索・救難		・日本領域及び日本の周囲の海域における捜索・救難活動並びにこれに関する情報の交換
	非戦闘員を退避させるための活動		・情報の交換並びに非戦闘員との連絡及び非戦闘員の集結・輸送 ・非戦闘員の輸送のための米航空機・船舶による自衛隊施設及び民間空港・港湾の使用 ・非戦闘員の日本入国時の通関、出入国管理及び検疫 ・日本国内における一時的な宿泊、輸送及び衛生に係る非戦闘員への援助
	国際の平和と安定の維持を目的とする経済制裁の実効性を確保するための活動		・経済制裁の実効性を確保するために国際連合安全保障理事会決議に基づいて行われる船舶の検査及びこのような検査に関連する活動 ・情報の交換
米軍の活動に対する日本の支援	後方地域支援	施設の使用	・補給等を目的とする米航空機・船舶による自衛隊施設及び民間空港・港湾の使用 ・自衛隊施設及び民間空港・港湾における米国による人員及び物資の積み下ろしに必要な場所及び保管施設の確保 ・米航空機・船舶による使用のための自衛隊施設及び民間空港・港湾の運用時間の延長 ・米航空機による自衛隊の飛行場の使用 ・訓練・演習区域の提供 ・米軍施設・区域内における事務所・宿泊所等の建設
		補給	・自衛隊施設及び民間空港・港湾における米航空機・船舶に対する物資（武器・弾薬を除く）及び燃料・油脂・潤滑油の提供 ・米軍施設・区域に対する物資（武器・弾薬を除く）及び燃料・油脂・潤滑油の提供
		輸送	・人員、物資及び燃料・油脂・潤滑油の日本国内における陸上・海上・航空輸送 ・公海上の米船舶に対する人員、物資及び燃料・油脂・潤滑油の海上輸送 ・人員、物資及び燃料・油脂・潤滑油の輸送のための車両及びクレーンの使用
		整備	・米航空機・船舶・車両の修理・整備 ・修理部品の提供 ・整備用資器材の一時提供
		衛生	・日本国内における傷病者の治療 ・日本国内における傷病者の輸送 ・医薬品及び衛生器具の提供
		警備	・米軍施設・区域の警備 ・米軍施設・区域の周囲の海域の警戒監視 ・日本国内の輸送経路上の警備 ・情報の交換
		通信	・日米両国の関係機関の間の通信のための周波数（衛星通信用を含む）の確保及び器材の提供
		その他	・米船舶の出入港に対する支援 ・自衛隊施設及び民間空港・港湾における物資の積み下ろし ・米軍施設・区域内における汚水処理、給水、給電等 ・米軍施設・区域従業員の一時増員
運用面における日米協力	警戒監視		・情報の交換
	機雷除去		・日本領域及び日本の周囲の公海における機雷の除去並びに機雷に関する情報の交換
	海・空域調整		・日本領域及び周囲の海域における交通量の増大に対応した海上運航調整 ・日本領域及び周囲の空域における航空交通管制及び空域調整

小樽と空母―

この違和感をどう言い表したらいいのだろうか

インディペンデンス抗議・平和船団に参加して

本田　桂寿美
（市民新党にいがたメンバー）

写真・今井明

夏休みは、とうの昔に関係の無い身分になってしまったのに、淡い桃色のコスモスの花が勢いよく咲き乱れ、最近セイタカアワダチ草から勢力圏を回復しつつある薄の穂が、金色に色付きはじめると、いつまで経っても9月というのは、意味もなくセンチメンタルと言うか、祭りの後にも似た名残惜しさに支配されるものですが、九七年九月五日の小樽は、真夏の暑さがそのまま残ったかのように、熱かった。まるで北海道中の熱気が、小樽に集結した（小樽市民談）かのように、冗談は止せと言うくらい、本当に暑かった。

●

その前日の九月四日の朝、私は、非核市民宣言運動・ヨコスカの平和船団の一行と、新潟港で合流し小樽に向かうフェリーに乗り込んだ。十八時間もかかって、五日朝五時。まだ夜の明けぬ小樽港に到着した。

海上保安庁に洋上デモの手続きのため立ち寄り、彼らが選んでくれたとい う、平和船団の出航場所のふ頭に到着。手慣れた手順で　見る見るうちに、2隻のゴムボートが出来上がる。そうこうするうちに気が付くと、どこからともなく大勢の人達が集まってきていた。単独行動を覚悟していただけに、沢山の人々とのこの出会いは、嬉しかった。

出発の“儀式”を終えて、いよいよ出港。渡された使い込まれたライフジャケットのファスナーが錆びていて上がらない。「紐を縛っておけば大丈夫。泳げますよね？」―ということは、海に落ちることもあるんだな？水泳部だったので一応泳げるけど、以前サイパンで、海に沈んだゼロ戦を見ようとして、ライフジャケット無しで潜り危うく溺れ掛けたことを思いだしてしまった。あの、死神に心臓を捕まれたような孤独感を再び味わうのはイヤだなぁ。「落ちたら、海上保安庁が助けてくれるから大丈夫。」との先輩方のお言葉を自分に言い聞かせながらボートに乗り込み、いざ本番。飛び入りの二人乗りのゴムボートを交えて、三そう数珠つなぎになって、入港してくるインディペンデンスを待つ。抗議行動自体は、多少、海上保安庁との衝突はあったもののこれといったトラブルもなく、私も海に落ちる事無く、無事終了した。

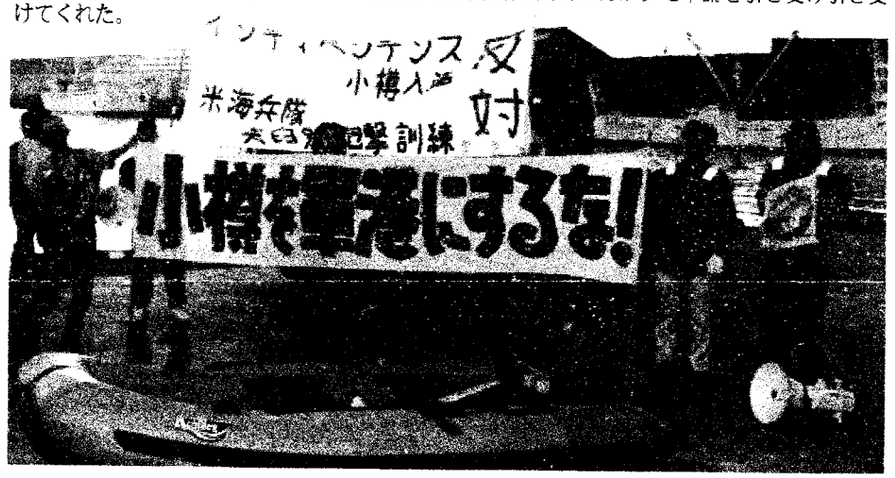
ただ、初めて洋上デモというものを経験したけれど陸上では考えられない規制の態度、タグボートが体当たりしてくるとか、モーターを利用して海水を掛けるとかいう直接的な防御行動には唖然とした。

彼らが守っていたのは米艦隊で、まるで私たちのほうが敵かのようであった。そんな中で、平和船団の皆さんは、海保の連中にはただ一言の罵声も浴びせる事無く、闘うべき相手は別に居るとばかりの行動展開が潔かった。二〇年以上も反基地運動を続けてきたしなやかさ、揺るぎなさを垣間見たようだった。二〇年という年月の重みを感じた姿だった。

●

その後、インディペンデンスと小樽の町なかを、見学することができた。町のそこここにセーラーを着た水兵の姿が目立つ、人目を引くその姿に群がる若い女の子たち（若クナイ人モイタケド）何だか形容しがたい違和感を感じた。街角のカフェテリアでビールを飲

3人で横須賀を出発した平和船団だったが本田さんのほか、三沢、札幌、小樽から合流。乗船者6人。ボート3隻、支援10数人にふくらんだ。札幌市議の大島さんがデモ申請を引き受け引き受けてくれた。



む姿は、たしかにキマッてるいい男も居た。だけどそれはまるで現実感の無いフィルムを見ている様で、私の違和感は彼らと私の現実の折り合わなさの様だった。もしここが小樽ではなく新潟だったら、私のこの感覚はもっと深かったかもしれない。普段見慣れた街角にいきなり非日常が入りこんでくる。そんな違和感だった。

インディペンデンスを間近で見たときに、違和感はピークに達した。友好ムードを前面に押し出して、穏やかな姿を見せてはいるけれど、この船は確実に大勢の人間を一度に殺すことの出来る威力を持っている。物珍しさに群がる人たちを、その気になれば一度に殺すことも出来る。そう考えるとゾッとした。こんな風にお祭り気分でいる「平和ボケ」した日本人、そして自分もその一人だということが本当にイヤになった。

●

そんなこんなでお役に立てたのかどうかよく判らない私でしたが、貴重な体験をさせて頂いた平和船団の皆さんと、カンパをして下さった新潟の皆さんに心からお礼をさせて頂きます。本当に、ありがとうございました。◆◆

軍隊があまりにも似合わない町に全国の仲間が集まった

十一月に全国でキャラバンを

報告 暮らしの安全保障を考える チャンプルフォーラム inゆふいん

山中悦子（編集部・写真も）

イチャリバチョーデー

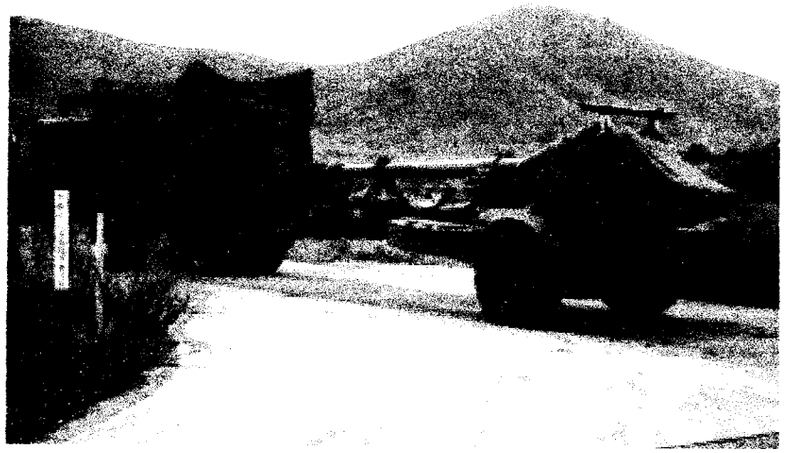
「イチャリバチョーデー（会えば皆兄弟・姉妹）」　沖縄のこの言葉が象徴する「チャンプルフォーラムinゆふいん」が九月六日、七日の両日情緒あふれる雨の湯布院で開催された。

「海兵隊に感謝？」そんな言葉が聴かれた。海兵隊に米本土に帰ってもらおうという運動がなかったら出会うことがなかったかもしれない人々が約四十名集ったのだ。名前だけのお付き合いだったのがウソのような親しみを持ってのご対面。沖縄から五名、広島から三名、佐世保から二名、熊本、北九州、山口から…と圧倒的に西優位ではあったが、王城寺原からの二名の存在が大きく、そこに東京、神奈川と参加して「第一回米海兵隊は日本にいらない！全国アクションプロジェクト作戦会議」は文字どおり全国会議となった。

沖縄・佐世保・王城寺原の女性たちと

ここは湯布院なのか沖縄なのか…、時々ふとわからなくなるほど沖縄色に満ちていたのはテーマもテーマだったし、時折三線の音、島歌が流れたからだったのか。宿泊・温泉付き、格式ある旅館での食事付き、その上一年に一度の薪能付き（…だったのだがこれは雨のため中学校体育館での観能に変更されたが）、ともあれ、市民運動の集まりには珍しい優雅さと現実的な話し合いがチャンプル（ごちゃまぜ）した二日間だった。

日出生台を歩いていたら、こんなものに出くわした。
美しい風景には余りにも似合わない。



それぞれの現場から

それぞれ地元で悪戦苦闘する日々。各地からの報告を聴きながら共感し、驚嘆し、「やっぱりみんながんばっているんだ」と素直に感心。会場には運動のベテランも新米も同席。使う言葉の難易度（日常での使われ具合）にもバラつきがあるのがチャンプルフォーラムらしくてよかった。課題に当事者として取り組む人も狭い意味での当事者ではない身で関わる人もイチャリバチョウデーで対等な立場で話し合った。

多くの人の発言の中で目立ったのは戦争責任問題。現在の緊急課題「新ガイドライン」の話は「朝鮮半島有事」の話になり戦争責任問題の話になるのだった。最近韓国を訪問したらこうだったああだったと体験を語る人が多かった。今後の運動展開で国際的なネットワーク（特にアジアとの）の必要性と可能性が語られたことも戦争責任問題が話された要因のひとつだったかもしれない。

もう一つはどうしたら運動に多くの人の参加が得られるかという永遠の課題。それさえ解決出来れば悪戦苦闘はなくなるかも？　沖縄の伊波さんや源さん、新垣さん、照屋さん、安里さん、そして呉の湯浅さんや佐世保の宮野さんからは刻々と深刻さを増す日米防衛協力体制の変化を裏付ける話が出された。これらの話はアクション計画に反映された。

（Mさんのないしょ話） 地元での運動ってやっぱり大変。事態は本当に重大なことになっているのになかなか大勢の人に参加してもらえないもの。今少し違う人たちとも一緒にやっている。そちらに出るからこちらにも来てねって。自分たちが目立つのはしょうがないと思うけれど、最近自宅に公安が来るようになったのよ。情報が欲しいらしい。

王城寺原　葦の会
大内直子さんの話

―運動を始めて「知る」ということが如何に大事なことかを知った。知らないことが今の政治を支持することだとわかった。大勢の人が知ったことで行動を起した。自分の住んでいるところがどんな地域であってほしいかを考えていけば運動につながる。運動を続けるためにはどんな地域にしたいかを考え続けていくことが必要。農産物の産直の仕事に携わっているところから政治が見えてくる。今、地元の人に地元にある農業をつぶして輸入に頼って大丈夫？と問いかけている。農業問題は都市問題でもあることをみんなに気づいて欲しいと思っている。でも人は日本の農業問題から生協に入ってくるわけではない。おいしいから入ってくる。トマト食べてみた？キュウリおいしかった？と聞くことからいろい

ろ話をしていく。

身体にはおいしいと感じる力があるがそれを脅かすものに対しては声をあげようと言っている。そして、信頼されて初めて「ここに米軍がくる」という話をする。私たちの運動は自分たちの地域に通じる自分たちの言葉で語って進めていく。米軍がく来ることが決まってこれから運動をどうしていくのかむずかしいところだけれどやっていくしかないと思っている!。

個人的には、まだ小さい子どもがいる若い母親だから大内さんにはいろいろご苦労はあるようだけれど、等身大の運動を自分らしくがんばっている彼女のさわやかさに皆感心。心から激励の拍手を送った。

大内さん

日出生台

見渡すかぎり悠然と広がるなだらかな草原。すすきの穂が揺れてほんの少しだけ秋の気配が漂い始めた雨上がりの日出生台の朝。「こんないいところが基地なんだ」と私が驚きの声をあげると案内の衛藤さんが「日本一すばらしいと評判の基地だから海兵隊員も大喜びするだろうと言われています」と教えてくれた。他を知らないから比較はできないけれど絶対評価でここは絶対いい!「いいところだ」と沖縄の照屋さんも感心している。伊波さんは熱心にビデオ撮り。源さんは黙ってじっと草原の彼方をみつめている。「王城寺原では基地の中は全く見えない」と和田さん。

海兵隊による実弾演習の日に政府や防衛庁、米軍の偉い人でも観閲するために準備されたのか、基地の全景を臨める斜面が二段にきれいに整地されていた。絶景絶景…もちろん私たちもそこから見た。草原には四季折々花も咲き衛藤さんちの牛もあちこちで草を食んでいる。ここに軍事訓練は似合わない。米軍の実弾演習はもっともっと似合わない。基地内に立ち入りが許された日に湯布院の皆さんはここへ来て飲んだり食べたり歌ったりしたという。もし基地がなかったら湯布院を訪れる観光客は間違いなくここにも足を運ぶだろう。湯布院の人たちが自分たちで生み育てた文化と共にこの美しい自然、緑の草原を堂々と自慢できる日が来るのはいつのことだろうか。

基地を見ての帰り道自衛隊の訓練車両に出会った。シャッターチャンス!注意されたらどうしようと内心ドキドキだったが大丈夫だった。とがめられなかった。ドキドキの理由はもうひとつ。砲撃台を真近に見てビックリしたのだった。初めて見た、本物だ!ドキドキ…。

事務局の浦田さんのお家は酒屋さん。店先にはしっかり演習反対の看板が、

暮らしの安全保障を考えるチャンプルフォーラムinゆふいん

第1回「米海兵隊は日本にいらない！」全国アクションプロジェクト作戦会議

11月に全国キャラバン

1997.9.6～7

－当面の課題－

①日米安全保障条約至上主義の排除と憲法の遵守
- 日米地位協定見直しから日米安全保障条約廃棄へ向けてのプログラム策定
- 思いやり予算の撤廃
- 反核、軍縮
- 民事特例法改正支援

②沖縄の米軍基地の縮小・撤廃
- 海兵隊の撤退；
- 海上ヘリポート建設阻止
- 在日米軍用地の強制使用取消と早期返還

③日米防衛協力のための指針見直し阻止

④正常な地方分権、分財の推進
- 米軍用地強制使用手続きの国への移管阻止
- 地方自治権の確立

－これからの具体的取り組み－

①「米海兵隊は日本にいらない」全国アクションプロジェクト展開のための緩やかなネットワークの構築

②思想・信条を越えた中、市民レベルでの交流の拡大

③国外へ向けての運動展開

④米海兵隊撤退、在日米軍基地の縮小・撤廃へ向けてのアクションプログラムの策定

－アクション計画－

「新ガイドライン」に異議あり！
全国縦断キャラバン

●目的
- 「新ガイドライン（日米防衛協力）」反対への世論形成
- 有事立法化の動き阻止
- 憲法の危機を訴え、「安全保障」についての世論喚起を！

●実施期間　1997.11.1～30
　11.30　全国一斉行動日

●実施形態
- 地域リレー方式：キャラバンカーは走らせない。
- 各地域の独自企画…集会　講演会　学習会　交流会　コンサート　バザー　映画会
- 活動する現場からの「報告」や「今後の連帯行動の提起」を基軸にする
- 「市民の声」を意見書や決議文などに集約して政府、政党などへ提出する

●実施ルート
北ルート　北海道　東北　関東
中部ルート　甲信越　中部東海　関西
西ルート　沖縄　九州　中四国
- 海兵隊砲撃演習地／米軍基地を抱える地域／日米合同演習開催地域／有事の際米軍が使いたいといっている港や飛行場などの施設のある地域を中心に全国各地

●本部事務局
くまもと市民センター
神田公司　TEL 096-345-5904

湯布院

昨年の二月、インターネット上で「湯布院の将来を考える会」（玉の湯内・桑野和泉方）のメッセージ「湯布院に米軍はいらない」をみつけた田巻編集長は早速桑野さんに連絡を取り了解を得て、キャッチピース四四号にそのメッセージを転載した。それが湯布院とキャッチピースとの初めての出会いだった。あの桑野和泉さんに会える！湯布院会議のお誘いは私にとってそれだけで充分魅力的な話だった。それほど湯布院のキャッチピースデビューは鮮烈な印象を編集部に残していたのだった。

いずみちゃん、あきらさん、りゅうちゃん、まみこさん、けんたろうさん、やっちゃん…、湯布院の人たちはみんなお互いをファーストネームで呼び合っていた。ここに来て「気持ちのゆとり」が人を素敵にしていることがよくわかった。誰もが笑みを絶やさず急がず慌てず、そしてすごいパワーを爆発させて次々にチャレンジしていく。温泉と美しいものに囲まれて生活している人たちにはかなわない…？でしょうか。◆◆

沖縄から

沖縄がかわれば、アジア・太平洋がかわる

報告㉙

「沖縄から」「沖縄ボイス」編集委員
伊波洋一
（沖縄県議会議員・前沖縄中部地区労事務局長）

〒901-22
沖縄県宜野湾市志真志517-1
沖縄キリスト教平和センター気付
TEL 098(898)6628
FAX 098(897)6653
郵便振替　鹿児島2-11249

全国へ拡大される米軍

日米防衛協力の新ガイドライン発表を前に、先取り的に全国各地の民間港湾への米軍艦の寄港ラッシュが続いているが、沖縄でもホワイトビーチへの米軍艦船の頻繁な寄港が続き、実弾砲撃演習の本土移転にともなう一五五ミリ榴弾砲や軍車両などは那覇軍港から日本政府手配の民間船が運送し、米軍人を輸送するために自衛隊機が嘉手納基地に飛来するなど新ガイドラインの先取りというべき日米防衛協力が進行している。

嘉手納基地では、ほとんど自衛隊機を見ることはなかったが、九月十八日から二十九日までの北海道・矢臼別演習場での実弾砲撃演習にむけて九月八日に先遣隊百五十名を運ぶために航空自衛隊のC130輸送機四機が飛来、中標津空港にむけて飛び立った。

本隊二二〇人は九月十八日に航空自衛隊の輸送機五機で嘉手納基地を出発した。

今回の輸送協力は、日米共同訓練で場合のような日米物品・役務相互協力協定に基づくものではなく、米軍単独の演習のために自衛隊法百条（土木工事等の受託）を初めて適用したもので、無理な条文解釈により自衛隊機を利用する今回の例は、米軍のための一方的な便益供与を行なうことが無制限に拡大されていくことを示すものだ。

また、報道によると、夜間砲撃のなかった沖縄と違い、米軍は演習の本土移転に際して午後十時までの夜間砲撃訓練を北富士演習場でも実施し、今回も矢臼別演習場で実施する予定。地元の別海町の佐野力町長は夜間訓練の中止を申し入れているが、海兵隊の責任者は、重要な訓練なのでぜひ実施したいとしている。

矢臼別演習場では北富士の三倍以上の規模と兵員で行なわれるように、米軍は本土移転によって砲撃演習の大規模化による質的な転換を計ろうとしており、そのことを日本政府が容認していることは問題である。

金武町では迫撃砲が激化

一方、日本政府が演習移転先の自治体や住民に沖縄のために演習移転を受け入れるよう説得したのと裏腹に、演習が移転した金武町のキャンプハンセン演習場では県道を封鎖しての榴弾砲演習が無くなったに代わりに迫撃砲や小銃などの演習が激化し、地域住民はいらだっている。

米軍の実弾砲撃演習の移転によって沖縄では頻繁に繰り返される小火器や迫撃砲演習による演習被害が多くなっており、数多い迫撃砲などの演習のために山火事が五月末から九回も発生している。九月十八日には七時間燃え続けた原野火災で約百万平方メートル（百ヘクタール）が焼失した。一時は民間地域への延焼が懸念されたが、金武町の消防車が出て消火にあたった。

九月十二日の迫撃砲の実弾訓練では金武町の伊芸区は激しい炸裂音に包まれた。演習が行なわれるレンジ四は実弾砲撃演習の着弾地近くの射撃場で沖縄高速自動車道から約三百メートル、伊芸区から六百メートルにある。伊芸区の安富祖区長は「県道一〇四号越え訓練が本土に移っても、実態は変わらない。住宅地の近くで実弾が飛び交っている現実を知ってほしい」と訴えている。

沖縄海兵隊の全国化

北海道の矢臼別（やうすべつ）演習場を始め、すでに演習が行なわれた山梨県の北富士演習場、これからの宮城県の王城寺原（おうじょうじはら）、大分県の日出生台（ひじゅうだい）、などへの米軍演習の移転は、自衛隊と米軍の日常的な連携強化と七月二十九日の日経が報じているように米軍に移動のための全国の民間インフラの実地調査を行なう口実となっている。

日経報道によると自民党の鈴木宗男副幹事長は釧路市内で記者会見し、在沖米軍の矢臼別演習場への砲撃訓練移転に関連して、米軍が七月下旬に道東の港湾、空港、道路を調査し"上陸地点"を選ぶことを明らかにし、根室市議会が地元の花咲港を米軍の上陸港する要望書を採択したことについて「ありがたい」と述べた。

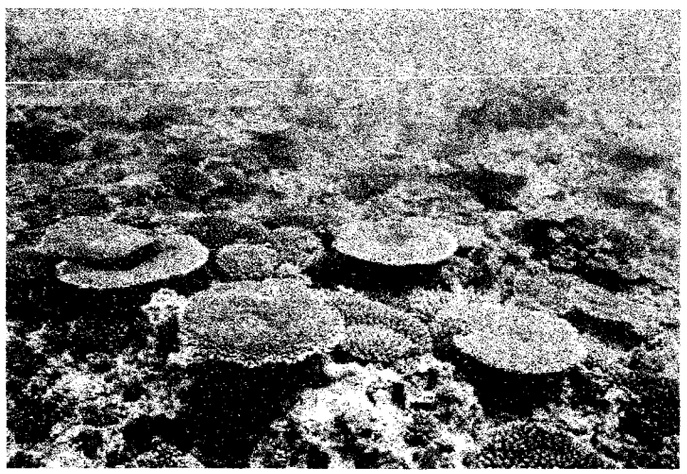
鈴木氏は九月十一日の内閣改造で沖縄・北海道開発庁長官に起用され、矢臼別演習場での実弾砲撃演習を前に九月十六日夜、鈴木長官主催で別海町の自衛隊駐屯地において米海兵隊歓迎夕食会を根室市長や商工関係者に日本人三十名と米軍約三十名の参加で開催したが、出席者から会費を徴収せず公職選挙法違反の疑いが報道されている。

移転後も演習被害の継続する沖縄現地や移転先の反対にもかかわらず規模や時間を拡大して砲撃演習を強行する米軍に対して鈴木長官が歓迎会を開催したニュースに沖縄県民の多くは驚き、違和感をもっている。北海道の多くの道民もそうなのではなかろうか。

政府主導のこのような米海兵隊の全国化をつづければ、沖縄のようにいつの日か、手痛いしっぺ返しを国民から日本政府が受けることになるだろう。

海上ヘリポート問題が山場に

普天間基地の返還にともなう代替ヘリポートとして名護市辺野古にあるキャンプシュワブ沖に海上ヘリポート基地を建設しようとしていることに反対する名護市民の意志を反映させようと「ヘリ基地反対市民投票条令制定請求」が全有権者の過半数を超える一万九千七百三十四人



辺野古の海に蘇生す珊瑚礁（撮影：高橋宏明）
名護市民の会作成の絵はがきの1枚（詳しくは18ページ）

分の署名を集めて名護市に提出されているが、九月定例名 護市議会で二十五日に上程、二十九日採決されることになった。海上ヘリ建設の調査を容認し、政府に振興策を求めている名護市長の意見書が注目されるが、市議会で多数の与党会派は条令案否決の姿勢を変えていない。市民投票推進協議会では、否決に対しては議会解散請求も考えつつ、市議会与党議員へ市民投票条令に賛成するよう説得を続けている。

山場に来ている海上ヘリポート建設問題を有利に展開するために、日本政府は、NTT電話案内や国立工業高等専門学校の誘致など地域振興策を打ち出しており、九月の内閣改造でも沖縄開発庁の政務次官に名護市出身の嘉数知賢衆院議員を任命し、九月十七日には梶山前官房長官が名護市を訪ね比嘉名護市長と約三十分会談した。会談後、梶山前官房長官は事前調査容認へのお礼を述べたと説明、さらに北部振興策へ「思い入れがある」と強調した。その後、北部市町村や議会の代表と懇談し、翌日は、大田知事と懇談、海上ヘリポート建設への県の関与を求めた模様。

反対派、推進派が同日に集会

梶山前官房長官の来沖は、海上ヘリポート推進派が商工業関係者を中心に名護市活性化促進市民大会を初めて開催した十九日の直前にあたり、関係者の同大会参加を促す無言の圧力となった。推進派の活性化促進市民大会には約千名が参加したが、会場で弁当や飲み物が配られるなど商工業者が従業員を参加させたようだ。比嘉名護市長も壇上に立ち挨拶した。

一方、海上ヘリポート建設に反対する市民・労働団体も、初めての一万人規模の県民大会を同日那覇市で開催した。県議会与党会派のよびかけで社民党、社会大衆党、共産党、公明沖縄の各政党に沖縄平和運動センターなどに加盟する労働組合、共産党系の団体、反戦地主会などの多くの市民運動団体が参加した。特に、名護市民投票推進協議会や辺野古地区のヘリポート基地建設措置反対協議会（命を守る会）からも多くの代表が参加し、集会後のデモでは先頭になって地元の反対の意志をアピールした。

那覇市の国際通りでは、デモに対して拍手や手を振って応援するなど、従来のデモとは違う反応が多く見られた。基地の県内移設反対、海上ヘリ基地建設反対、名護市民投票実施への県民世論の支持を沿道から感じるデモ行進だった。途中、ミュージシャンの喜納昌吉さんが彼のライブハウスから飛び出して来て、辺野古区民に合流して デモに最後まで加わった。

討論会が相次ぐ

海上ヘリポート反対運動に対抗して建設推進の側からも積極的な取り組みがなされるようになった。九月は、海上ヘリポートについての反対派と賛成派の討論会が相次いだ。

九月五日には大学生や高校生など若者達が主催した「海上ヘリポートて何だばー（何なの）」討論会が那覇市内で延々六時間開かれ、約百五十人が参加した。推進派として県内最大の土木建築会社の国場組会長と辺野古活性化促進協議会長、反対派としては建築家である真喜志好一さん、名護市民投票推進協議会代表の宮城康博さんが発言した。推進派の主張は、「理想論では飯食えない」として、ベトナム戦争当時の辺野古の町の賑わいをもう一度取り戻すために日本政府の振興策への熱い期待が語られた。

反対派は、海上ヘリ基地が建設されれば、基地は固定化され、子や孫の代までなくならないとして、名護市民の意志を問うべきだと主張した。

九月十二日には、ローカル紙が主催して現地の名護市でも「海上基地と北部振興」をテーマに討論会が開催された。賛成側に西田自民党県連会長と辺野古活性化促進協 会長、反対側に玉城義和社民党県議が宮城市民投票推進協代表が発言者となった。北部振興の最大の好機ととらえる賛成派と基地の県内移設に反対する反対派の意見 は平行線のまま終わった。

一部の建設業界を中心に推進派が形成されているが、県民の多くが県内移設の反対と海上ヘリポート基地建設に反対していることに変わりはない。いよいよ名護市民投票の実施が決まれば、反対、推進の両派ともに、さらに激しい 運動を展開していくことになる。

県民投票から一年

少女暴行事件と一〇・二一県民大会から数えると二年になろうとする沖縄で、奇しくも県民大会の会長を努めた当時の嘉数知賢県議会議長と事務局長だった玉城義和社民党県議の二人が名護市選出であったが故に、嘉数氏が沖縄開発庁の政務次官となって海上ヘリポート建設を推進する側になり、玉城氏は反対派の先頭に立っている。県民投票から九月七日で一年となるが、在沖米軍基地の整理縮小・撤去を求めた沖縄県民の運動のうねりは、大田知事の縦覧代行応諾をターニングポイントとして日米のSACO合意と共に、日本政府が提示し、沖縄側が飛び付いた沖縄振興策によって かき消されようとしているようにみえる。

九月の沖縄タイムス、琉球新報ともに県民投票および知事の代行応諾から一年にあたり七名の識者や関係者の論評を掲載している。佐久川政一沖大教授（県民投票推進協議長）、新崎盛暉沖大教授（一坪反戦地主会世話人）、米盛祐二琉大名誉教授、高 良鉄美琉大教授、高里鈴代（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会共同代表）等が一年を振り返り論評しているが、総じて、大田知事の県民投票から五日後の公告縦覧代行受諾が、その後の沖縄基地問題解決の流れを基地問題と経済・振興策の取り引きに変えてしまったと認識し、基地問題と振興策の取り引きに厳しい批判をしている。もちろん、取り引きの当事者は、一方が日本政府であり、他方は大田県政である。

米盛祐二琉大名誉教授は、大田知事は特別立法を避けるために代行受諾したようだが、むしろ代行受諾によって米軍用地特措法改正がやりやすくなったと指摘。また、「知事は以前はいろんな人々の意見に耳を貸していたが、このごろは基地に反対している運動体そのものを煙たがっている。まともなことをしているつもりだろうが、はたからみると決してそうではない」と手厳しい。知事への信頼と期待を捨てていないとも述べているが。

高良鉄美琉大教授も、県民が主役の県民投票がわずか五日で反古にされたことに多くの県民がチルダイ（脱力感）を感じてしまったと述べ、しかし、県民が主役となっていつの日か沖縄の平和への思いが世（論）世（紀）・世（界）＝【ユー・ユー・ユー】を動かすことへの期待を寄せている。高里鈴代さんも女性の立場で、ヘリポートの県内移設でなにも変わっていかないことを指摘し、大田知事が「少女の尊厳を守り切れなかったことをお詫びします」と言ったことを取り上げて、いまの大田県政の目が振興策ばかりに向いていると指摘、基地あるがゆえの人権侵害や人間の尊厳に対する侵害への視点

を大田知事に求めている。

厳しい大田知事への評価

このような厳しい評価が大田県政に対する県民の認識となりつつあり、大田知事が海上ヘリポート基地を容認することがあれば、県民の知事離れは加速するだろう。

ひとつの危険信号として、大田県政と総理官邸との密接な関係が、県政の中での手続きより、官邸サイドの政治スケジュールに合わせて物事を決めていく傾向が強くなりつつある。沖縄全県フリーゾーン化をめざす沖縄県の手順をみても、十一月二一日の沖縄返還二十五周年記念式典での総理談話への盛り込みをめざして極めて短期間に決定しようという意図が見える。

このような中で十月で任期を迎える吉元副知事の再任を巡って県議会与党から否定的な意見が相次いだのも吉元副知事が県議会より官邸優先して物事を決めていると感じているからだ。

大田県政は、自立のための振興策を求めているようだが、経済的自立だけでなく精神的自立も求められているのではなかろうか。

（九月二十日記）

ヘリポートいらない名護市民の会の

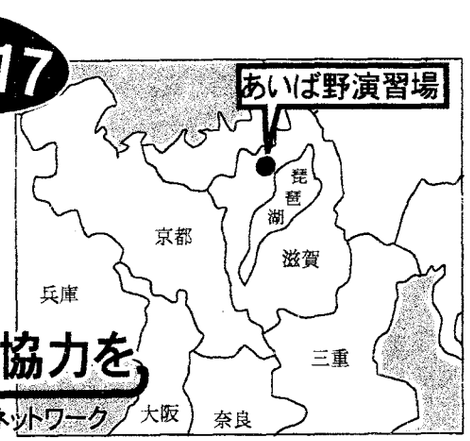
命育む美ら海（ちゅ）

絵はがき

海上ヘリポート基地の建設予定地・名護市辺野古の海は、豊かな生命が息づく美しいサンゴ礁の海。6枚組の絵はがき1枚1枚が私たちに静かに語りかける。「この海を殺さないで」。（編集部）

一組五〇〇円

ヘリポートいらない名護市民の会 ● 905 沖縄県名護市名護1591 電話：0980（54）3643 FAX：0980（51）1170 電子メール：civic@mail.jinbun.co.jp



あいば野での「日米軍事演習」をやめろ！

地元紙への意見広告にご協力を

あいば野「日米軍事演習」に反対する京滋住民ネットワーク

新「ガイドライン」が関西にやってくる！

滋賀県あいば野（饗庭野）演習場で陸上自衛隊と米陸軍が十一月四日から十一月十七日、新潟県関山演習場で陸上自衛隊と米海兵隊が十一月三日から十一月十五日にかけて、実動演習を行なうことがこの夏発表されました。

あいば野演習場は、琵琶湖の湖西に広がるあいば野大地を使った陸上自衛隊の演習場です。中部方面隊（中部、近畿、四国、中国地方）の演習場としては最大規模のもので、総面積は二三五四 万平方メートル、約五キロメートル四方の広さがあります。

これまでの演習

七八年のガイドライン策定以降、各地で自衛隊と米軍の共同演習が行われるようになり、関西地区ではこれまでに三度行われました。場所はいずれもあいば野演習場で、八六、八七、九一年に行われた演習はいずれも中部方面部隊と沖縄の海兵隊との演習でした。今回初めてハワイから米陸軍がやってきます。

これまで大きな事故こそ起こっていませんが、演習の度に米軍に対する不安や反対の声が上がり、集会やデモも行われています。

港など民間施設を利用か？

日米両政府によってガイドライン見直し―「新ガイドライン」の策定が進められてきましたが、その最終報告が九月下旬に出され、十一月に承認されようとしています。今回の演習はちょうど時期が重なり、「新ガイドライン」の先取り的性格を持っているといえます。

民間人や自治体も全面的に米軍に協力させるというのがこの「新ガイドライン」の眼目です。空母インディペンデンスの小樽港への入港をはじめとして、米軍は民間施設の利用露骨に要求し始めました。関西では、神戸港、大阪港、舞鶴港、関西新空港などの使用を求めています。これまでは小松基地などの米軍共用空港を利用していましたが、今回の演習を口実にこれらの施設を利用する恐れが十分にあります。

軍はびわ湖を汚すな！

京都、大阪に住む人間はその生活用水の多くを琵琶湖に頼って暮らしています。琵琶湖は近畿の命の水瓶です。演習場は琵琶湖の湖岸に位置し、もしここが汚染されるようなことがあれば、それは直ちに近畿に住む住民の命に関わる問題となります。

そして米軍は、劣化ウラン弾の「誤射」や基地の恒PCB汚染などでも明らかなように、環境を破壊し汚染する元凶以外の何者でもありません。米軍の演習によって私たちの命が脅かされようとしています。

京滋住民ネットワーク発足

あいば野での演習は周辺住民の問題であると同時に滋賀、京都、大阪など関西に住む住民の問題でもあります。危険な演習を見過ごすわけには行きません。九月七日、滋賀、京都、大阪の住民が集まり相談会を開きました。その場で、軍事演習に反対する、ゆるやかな連絡会が結成され、次の取り組みが決まり、現在動き出しています。

関係自治体への公開質問状
地元新聞に意見広告掲載
広く個人、団体と共闘しての現地集会
現地調査

●自治体への公開質問状

住民の命と安全を守るのは自治体の大切な役割です。とりわけ政府が住民の権利や生活よりも米軍への奉仕を優先させているこの国では、自治体に住民の立場に立って国や米軍に対して発言できるだけの責任と気概が求められています。会では、京都、滋賀の全自治体（約一〇〇）に対して、演習への態度や米軍の監視、ガイドラインなどについて公開質問状を送りました。回答はインターネットで公開する予定です。

●地元新聞への意見広告

海兵隊の撤退を求めるニューヨークタイムスへの意見広告は様々な人々の共感を呼び日米市民の新たな交流の契機となりました。これに学び、会でも地元新聞への意見広告掲載の呼びかけを開始しました。具体的には動けないが、ガイドライン見直しを憂え、あいば野での日米軍事演習に反対だと考えている人はかなりいるはずです。意見広告によってそうした人々の声を一つの形にできればと願っています。

同封の呼びかけビラをご覧いただき、是非ともご協力よろしくお願いします。

●集会

大阪、京都でも、ガイドライン見直しに対して様々な個人、団体が反対の取り組みをしています。会ではそうした個人、団体と連絡を取り、共闘して演習直前には集会を開くことを目指しています。沖縄からのキャラバンの話もあります。あいば野での演習に反対することでガイドライン見直し反対の意思を示して行くつもりです。

●現地調査

九月二一日に現地調査を行い、同時に自衛隊に対して中止の申し入れを行いました。当直士官からは申し入れ書の受け取りを拒否され、警備の自衛官からは外から写真を撮っただけで「不審者」呼ばわりされるなど歓迎されませんでした。水質調査や土壌分析などが今後の課題です。

（大塚岳史・反戦ドタバタ会議）

劣化ウラン弾はどこに行ったのか？

「在日海兵隊から撤去」報道であらためて浮き彫りになった、日本政府の不作為と無責任

青木雅彦
（反戦ドタバタ会議）

劣化ウラン弾貯蔵疑惑のある横須賀の米海軍浦郷弾薬庫(中央)。すぐ近くに人家が立ち並んでいる。

冷めやすい日本の世論を反映しているのか、ガイドラインをスムーズに「見直」さなければならない配慮からか、今年の広島・長崎の原爆式典でもそれぞれの街のすぐそばにある劣化ウラン弾に対する言及は、両市長からはなされなかった。しかし、わずか半年前の鳥島の「誤射」事件を忘却の彼方に置いている日本のジャーナリズムとは少し違って、国際的には劣化ウラン弾に対する関心は着実に高まっているようである。

8・9に劣化ウラン弾全面禁止を訴え

その原因は、いわゆる湾岸戦争症候群の事実を米政府が様々に隠蔽し、その事実が明らかになる過程で「症候群」の原因の一つである劣化ウラン弾の害が広く認識されてきたからである。今年の八月九日、ワシントンでInternational Action Center（湾岸戦争に反対したラムゼイ・クラーク氏らが組織）などの約三〇の平和団体（日本の被団協含む）の呼びかけでヒロシマ・ナガサキを追悼する集会が行われたが、その呼びかけ文に記されている要求事項の第一は、「すべての劣化ウラン兵器の全面禁止」だった（参照http://www.iacenter.org/）。この集会には日本人はもちろん、プエルトリコ（演習場で米軍が劣化ウラン弾を使用した疑い）や韓国（劣化ウラン装甲板が捨てられていたことが今年判明）からも代表が参加していて、元湾岸兵士たちとともに、すべての劣化ウラン兵器の撤去を訴えた（「毎日新聞」八月一一日）。

「海兵隊の全劣化ウラン弾を撤去」

恐らく以下の日本での「事件」は、そのような国際的な反劣化ウラン弾の世論とは無関係ではない。たとえ日本人が気がつかなかったとしても。

八月一四日付の毎日新聞は、ペンタゴンのベーコン報道官が同紙とのインタ

ビューで語った話として、米軍が「沖縄の米軍基地に配備していた劣化ウラン弾を既に全面撤去し、韓国に移送した」と伝えた。このベーコン報道官は、「劣化ウラン弾は旧式テレビより安全」と記者会見で語り、日本の外務大臣に入れ知恵?した張本人でもあり、その真偽は定かではなかった。そもそもこの「撤去」は日本の外務省にも伝えられてはおらず、外務省日米安保課は沖縄県の問い合わせに対して、「在日米大使館に確認したところ、劣化ウラン弾は在沖米海兵隊軍基地のみならず、在日米海兵隊軍基地すべてから撤去されたとのことであった。ウラン弾が韓国に移送されたかどうかについては確認できていない」と連絡した（「琉球新報」八月十六日）。

大きな疑問は（1）「撤去」された在日米軍基地の劣化ウラン弾はどの基地にあったものか、海兵隊以外の劣化ウラン弾はどうなのか、（2）劣化ウラン弾はどこに移されたのか、ということだが報道は錯綜した。

現在まで報道されているところを整理すると次のようになる。

（1）海兵隊所有の劣化ウラン弾については在日米軍基地からすべて撤去（米大使館、在日米軍司令官回答）。沖縄以外の例えば岩国基地の劣化ウラン弾も撤去されている（山口県への米国大使館回答、「中国新聞」九月十日）。他の軍種、つまり陸・海・空軍の所有する劣化ウラン弾の在日米軍基地内の有無については一切回答しない。なお鳥島で「誤射」された千五百二十発の劣化ウラン弾のうち回収されたのは米国に持ち帰られた二三三発だけで、残りは放置されたままである（日米安保課、「沖縄タイムス」八月一六日）。

（2）ベーコン報道官は在日米軍の劣化ウラン弾が「潜在的戦場に近い」韓国に移送されたと語ったが、在韓米軍は琉球新報の問い合わせに「韓国に移送された事実はない。過去二年間の記録を見たが、沖縄から韓国に劣化ウラン弾が運ばれたという事実は見当たらなかった」と答えた（同紙八月十六日）。外務省日米安全保障条約課は「撤去先はグアム」とする米国大使館の回答があったとしている（「中国新聞」九月十日）。

崩れた日本政府の言い逃れ

この劣化ウラン弾「撤去」問題では、いくつかの教訓がある。

まず日本政府の恐るべき「不作為」。首相や外相は国会で繰り返し「米軍が使うから劣化ウラン弾を撤去を要求しない」と答えてきた。もし米側の海兵隊基地からの撤去が事実とすると、日本側の撤去を要求しない論拠も失われている訳だ。当然陸軍や海軍の所有する劣化ウラン弾の撤去を要求しなくてはならないはずだ。第二に、劣化ウラン弾が持ち込まれようと撤去されようと、それをチェックすることができない日本の行政の責任のなさだ。その有無に関してはアメリカ側の「善意」（?）の情報公開に頼らざるをえないあり方では住民の不安は解消されない。

第三に、冒頭にも述べた劣化ウラン弾に対する日本の反応の鈍さだ。アメリカ側が劣化ウラン弾の「移送先」を韓国からグアムと言い換えたのも、毎日新聞の報道内容が韓国で問題化したというのが大きな理由のようだ。もちろん劣化ウラン弾がばらまかれた鳥島の隣の久米島の住民は、国に対し村民の健康診断の実施を申し入れている（未だ実施されず）が、国政レベルではほとんど問題にもされていない。

撤去されても気がつかないということは、また持ち込まれても分からないということだ。米軍基地の中を日本側がチェックできるような仕組みがないとどうしようもない。去る八月一四日に劣化ウラン弾貯蔵疑惑のある横須賀の米海軍浦郷倉庫地区（弾薬庫）で、鳥島の劣化ウラン弾事件後初めて基地への立ち入りが認められた。ただし申請と違い中に入ることができたのは原田章弘市議一人だけ。写真撮影も厳しく制限されて、肝心の劣化ウラン弾に対する質問にも「地区内に保管している弾薬の種類や量は言えない」という答え（「神奈川新聞」八月一五日）。秘密主義は依然として徹底している。

劣化ウラン弾反対は「テロリスト」？

劣化ウラン弾の有無をなぜ答えないのかは「テロリスト」に情報を与えないためとされるが、実際には日本の世論に目隠しをするためだ。政府が米軍以上に米軍を擁護する立場に立っているから、市民や自治体が立ち入り要求を強めて行くしかないが、全くそれとは逆向きのベクトルが最近表れている。

それがガイドライン（防衛協力指針）の改定だ。すでにこの中間報告の別表の「米軍の活動に対する日本の支援」の項目には、「米軍施設の警備」、「日本国内の輸送経路上の警備」などが上げられている。これは例えば劣化ウラン弾の有無の調査や、輸送に反対する行動も「犯罪」とされるということだ。実際この別表には「日本国内の治安に関する情報の提供」もちゃんと書き込まれている。ガイドライン改定に伴う「諸法令の制定」にはスパイ防止法的な規定が書き込まれるだろうことは想像に難くない。◆◆

原子力艦入港情報

(95)

1997.8.22～1997.9.22

S＝原子力潜水艦（原潜）スタージョン級
L＝原子力潜水艦（原潜）ロサンゼルス級

横須賀

◇	08/24	15:59	原潜キーウェスト（L）出港。
◆	08/26	10:14	原潜ポーツマス（L）入港。
◇	08/28	15:47	原潜ポーツマス（L）出港。
◆	09/06	10:03	原潜キーウェスト（L）入港。
◇	09/12	15:37	原潜キーウェスト（L）出港。
◆	09/16	09:47	原潜インディアナポリス（L）入港。
◇	09/18	13:49	原潜インディアナポリス（L）出港。
◆	09/21	08:00	原子力空母ニミッツ（L）入港。
◆	09/22	09:38	原潜ブンマートン（L）入港。

横須賀累計（うち原潜）：22(21)

佐世保

◆	08/30	16:06	原潜インディアナポリス（L）入港。
◆	08/31	11:07	原潜バッファロー（L）入港。
◇	08/31	15:58	原潜バッファロー（L）出港。
◇	09/08	16:44	原潜インディアナポリス（L）出港。
◆	09/10	09:45	原潜ヘレナ（L）入港。
◆	09/19	15:55	原潜バッファロー（L）入港。
◇	09/21	15:55	原潜バッファロー（L）出港。
◇	09/22	09:56	原潜ヘレナ（L）出港。

佐世保累計（うち原潜）：17(17)

ホワイトビーチ（沖縄・勝連町）　なし

◆	08/25	16:00	原潜キーウェスト（L）入港。
◇	08/26	10:00	原潜キーウェスト（L）出港。

ホワイトビーチ累計（うち原潜）：9(9)

●1997.1.1から9.22までの各地の原子力艦入港数：　（ ）内は原潜

横須賀	22 (21)
佐世保	17 (17)
ホワイトビーチ	9 (9)
合　計	48 (47)

編集室から

●いつもの（や）さんの芸能情報です。結婚しちゃった好感度No.1女性「♪あ～オトコのやすらぎ」の飯島直子ちゃんのご実家って、横浜市港北区の田巻編集長の家からバイクで4分ぐらいのところにあります。田巻さん知ってた？ワタシなんか彼女がお母さまのために建てた1億円の美容院のポストにチラシを入れたこともあるんですよ。あんまり威張ることでもないか…。（や）

●「ニミッツ」がヨコスカにやってきた。久しぶりで平和船団に乗った。二日酔いのアタマに潮風は心地よく（事態の重大さにもかかわらず）ノッてしまった後でちと後悔。それにしても世の中さらにトンデモナクなりそうだ。と言うのは想像力のない人の多いこと（俺にあるのだ、ということではないが）。ワシ、もう知らん。しかし、自分の生活がまずしっかりしていなければ天下国家を論じても説得力がない訳で、何とかせねば、と長期的スランプの中で悶えるおれなのである。乱文をお許しあれ。（ま）

●というわけで（どういうわけなのだ）、ニミッツだガイドラインだとかまけているうちに、前号編集後記の主題であったベイスターズ問題も大した波乱もなく収束に向かいつつある。「優」とか「勝」とかいう言葉を一瞬でも思い浮かべたワタシが今となってはなつかしい。ところで、オーヤ監督も契約切れということで、次期指導者は「この人しかいない」というフクアンが実はあるのだ。その人の名は…あわわわ、ヒミツだよ～ん。（た）

会計報告

(978.14～9.26)

［収入］

○前月からの繰越し			580,000
○今月の収入			84,000
会費収入		75,000	
（内訳）	維持団体	0	
	維持個人	0	
	参加団体	0	
	参加個人	12,000	
	通信会員	63,000	
カンパ収入		9,000	
預金利子		0	
資料収入		0	
運動収入		0	

［支出］

●今月の支出			191,269
事務所代（9、10月分）		80,000	
水道光熱費		4,097	
電話ＦＡＸ費		3,790	
郵送費		44,432	
文具・備品		2,940	
印刷・コピー代		48,300	
振り込み手数料		1,400	
雑費		6,310	
●次月への繰越し			472,731

＊運動費は運動プロジェクト毎の独立採算となっているため、それにあてはまらない収支のみがこの欄に計上されます。

お詫び

●いつも月刊キャッチピースをご愛読いただきましてありがとうございます。毎号印刷しながら誤字・脱字などのミスを発見しては一同「…」となっております。「前号のお詫びと訂正コーナー」が必要かもしれないと反省しきりです。許されない言い訳を敢えてさせていただけば「…」。毎号綱渡り発行です。

・54号の訂正（編集後記）オダギリス→OXALIS 他

・55号の訂正 新ガンドライン→新ガイドライン 他

月刊キャッチピース

Ｎｏ．56（通巻135号）

発行● 脱軍備ネットワークキャッチピース

連絡事務所●〒222 横浜市港北区錦ヶ丘10-4 ハイツ幸1-B

☎・FAX 045(433)3483

E-MAIL : tamaki@ab.mbn.or.jp

編集● 月刊キャッチピース編集委員会

郵便振替● 00160-7-136148キャッチピース

定価● １００円（通信会員年間３０００円）